

Weekly Report

小諸浅間ロータリークラブ



ロータリー:
変化をもたらす

2017~2018 年度

国際ロータリーのテーマ

- ◆例会日/週火曜日 12:30~13:30
- ◆例会場/小諸市鶴巻 音羽
- ◆事務局/〒384-0025 長野県小諸市相生町 1-2-12 エイワンビル 2 階
- ◆会 長 / 小池平一郎
- ◆副 会 長 / 橋詰 希望
- ◆幹 事 / 小林 秋生
- ◆ガバ広報・情報委員長 / 依田 晋一



NO. 1413 平成30年5月29日

◆点鐘	小池平一郎会長
◆SAA	黒澤 明男 委員長
◆ソング	それこそロータリー
◆ゲスト	尹 美亜様

【会長挨拶】 小池平一郎 会長

我々、小諸浅間ロータリークラブのチャーターメンバーでありました両川栄さんが亡くなられ、26日お通夜、27日葬儀が営まわれました。お手伝い頂いた会員の皆様、また参列された皆様、ご苦労様でした。ここで改めて皆で黙禱を捧げたいと思います。

また、26日には小諸ロータリークラブの会員であった美斉津洋夫さんの葬儀がありました。同じ26日(土)小林幹事と私は佐久ロータリークラブの創立40周年記念式典と祝賀会に参列して参りました。

佐久ロータリークラブは1998年(昭和53年)5月26日に小諸ロータリークラブをスポンサークラブとして29名のチャーターメンバーで設立したしそうです。現在会員40名で、2016~2017年度に原拓男ガバナーを輩出されたことは素晴らしいことだと思います。40周年記念事業の中で佐久ロータリークラブの歌を制定されたのには驚きでした。記念アトラクションはこの歌の披露と岩崎敏信 & Blue Tronbones によるジャズ演奏でした。

記念祝賀会は17:00からの予定でしたがアンコールが続き、スタートがだいぶ遅れ、小諸ロータリークラブ木村会長の中締めの方歳三唱の頃は7時半を回っておりました。

このところ緊迫した国際情勢の中、女子バドミントンのユーバー杯決勝でタイを3-0のストレートで破り、37年ぶり、6度目の世界一に輝いたニュースが眼を引きました。1960~1970年代は日本女子は強く、世界一を誇っていましたが、1981年東京大会以来、優勝から遠ざかっていました。ところで、Uber Cup(ユーバー杯)というのは女子バドミントンの世界別対抗戦であり、1930年代に活躍した伝説の名プレーヤーベティ・ユーバーに因んでいるようです。今回はタイのバンコクで開催されており近年圧倒的に強かった中国を倒し、波に乗るタイは地元の大応援に後押しされていましたが、シングルで先陣を切った山口茜が、元世界女王タイのラチャノック選手を3-0で破り、日本に波を引きよせた様です。続くダブルスの福島由紀・広田彩花の世界選手権準優勝のペアもストレート勝ちし、第3試合は昨年の

世界選手権女王の奥原希望選手が、これもストレート勝ちし、37年ぶりのユーバー杯を手に入れました。

この後、男子のトマス杯ではにほんは第1シード中国と対戦することになっています。

残念ながら1-3で中国に敗れ、準優勝とのニュースが入りました。

【幹事報告】 小林 秋生 幹事

1. 関口孝裕ガバナー補佐より「会長・幹事会及び新旧引継ぎ会」について

日時 6月22日(金)17:00~

場所 佐久グランドホテル

2. 週報

千曲川IRC

- ・6月5日(火)クラブ協議会(夜間例会)

次年度委員会計画 18時より

《本日の配布物》

週報 1412号

◆出席報告 渡辺 文夫 委員

会員数23名 出席義務者23名 免除者0名

本日 出席 18名

事前MU 1名 78.26%

前々回(5/16) MU 0名 61.90%

◆委員会報告

次期会長 橋詰 希望 会員

- ・来週・6月5日(火)クラブ協議会(夜間例会)次年度委員会計画です。

次期委員長の皆様は計画案をご持参下さい。

◆ラッキー賞

NO. 17 加藤 輝男 君

次週のプログラム:

6月5日「クラブ協議会(夜間例会)

次年度委員会計画」

次々週のプログラム:

6月12日「職業奉仕賞」

奉仕プロジェクト委員会

小池平一郎君	尹美亜様、今日は卓話よろしくお願 致します。
両川 博之君	生花のお礼
前田 博志君	尹さん、今日はありがとう。
加藤 輝男君	尹美亜さん、今日はありがとうござ います。ラッキー賞も当たり素晴らしいで す。

小林 秋生君	両川会員、ご尊父様のご逝去改めてお 悔やみ申し上げます。
橋詰 希望君	尹美亜さん、本日はありがとうございます す。応援します。
前田 博志君	尹さん、今日はありがとう。
掛川興太郎君	

◆【本日のプログラム】「東日本大震災ドキュメンタリー映画の話」 尹 美亜様



臼田で生まれ育ち、野沢北高卒業後津田塾大学へ行き、最初についた仕事は広報の仕事だった。「伝える」という仕事も面白かったが、徐々に「作る」仕事がしたいと思い転職。どうせなら自分が好きなことをと思い、舞台芸術の方に行きたいと思っていたが、タイミングよく映画監督の事務所に声をかえてもらって映画業界に20代終わりで転職した。

映画プロデューサーの仕事は、法律(契約書)、お金(資金調達と回収)、人(チーム作り)の3つが大きな仕事だが、それ以外のありとあらゆる雑用と、トラブル時のごめんなさい係り。映画制作中は毎日なにかしらトラブルが起こるので、いつもいつも関係各所に謝ってばかりいます(笑)。

映画『一陽来復(いちようらいふく)』は初監督作品。それまでのプロデューサーの仕事との違いは、決定権があること。監督がどうしたいのか聞かれ、それに向かって、専門部署のベテランたちが力を尽くしてくれる。責任が重いことではあるけど何てありがたいことだろうかと感じました。もう一つの違いは、宣伝のとき監督は取材を受けたり舞台挨拶をしたり、とにかく人前に立つ。これがプロデューサーとの大きな違いで、裏方に慣れているのであればは落ち着きませんでした。映画を一人でも多くの方に見ていただきたい一心でこなしてきました。

映画作りはやみつきに。映画のスタッフというのは季節労働者のようなもので、作品から作品にわたりあるく感じで、不安定な職業ですが、何もないとこから企画して撮影して編集して世に出して見てもらう、というのは本当にやりがいのあることで、やみつきになってしまいました。

映画『一陽来復』の取材を通して感じたのは、目に見えないことというのが本当にたくさんあって、目に見えないことを想像する力が大事なんだということ。被災された方々は、毎日仲間うちでは冗談を言って笑い合っ暮らしているが、心の中には大きな傷を抱えている。特に家族を亡くした方々の傷というのは、なくなることは決してない。毎年、

毎日、毎時、思い出しては心を痛めている。それでも笑って、前を向いて、生きている。今被災地に行ってももう瓦礫や震災の爪痕を見ることはない。だからといって、心の傷がなくなるわけではないし、あの震災がなかったわけではない。だから私たちは、目に見えるものだけではなく、目に見えないことを心で感じて、想像して生きていくことがより大事になっていくと思った。

もう一つ強く感じたのが、人とのつながりがすべてであるということ。子ども3人全員を亡くされた石巻の遠藤さんも、震災直後、生きる意味を失っていたが、精神を壊さずに今まで生きてこられたのは、周りに常に人がいてくれたからだという。物理的に常に周りにいて、仕事をさせてくれたり、話をしたり、決して一人にさせない、という周りの人々の意志があったから、あの地獄のような日々を生き抜いてこられた。人を救えるのは人しかいない、お金でもないし食べ物でもない、人の思いが救ってくれる。実際、笑顔を作ることが前を向くのいかに大事か思い知らされるが、笑顔を作るのも一人では作れない。仲間や家族がいるから人は笑顔を作ることができる。今回佐久シネマで公開した時も、その時期のラインナップでは1番たくさん動員することができたのだが、それも私の実家の、両親や兄たちが前売券を売ってくれたから。北高のOBの方々や、地域の方々が、宣伝をしてくれたから。人のつながりがあったから、佐久アムシネマの公開も成功することができた。これほど人とのつながりがいかに偉大な力を発揮するかということをも身につまされたことはなく、人とのつながり、がいかに大事かということ改めて実感しています。